

慶應 SFC 学会(A)研究成果発表(学会発表)
慶應義塾大学総合政策学部 4 年 成瀬茉倫

成果報告書

【発表概要】

○タイトル

Japanese island music diaspora: An autoethnographic case study from an Amami Island 島唄
唄者 (shimauta singer) in Tokyo

○発表形式

口頭発表・オンライン

○学会

47th International Council for Traditional Music World Conference, 13-19 July 2023, Legon,
Ghana (<http://ictmusic.org/ictm2023/programme>)

○参加期間

7 月 15 日(土)

○開催形式

オンライン参加

【研究概要】

"シマ唄"は、日本の奄美群島（奄美大島、喜界島、徳之島、沖永良部島、与論島）の伝統音楽で、1466 年の琉球支配、1609 年の薩摩侵攻、1945 年の米軍上陸という圧制の歴史を乗り越えて古来より受け継がれてきた。日本の標準語では、シマ唄の「シマ」は island としての「島」を意味するが、奄美では「シマ」とは「集落・村」をも意味する。したがって、伝統的な意味でのシマ唄は「集落の歌」である。しかし、2021 年 7 月に奄美がユネスコ世界自然遺産に登録され、メディアへの露出が増えたこともあり、シマ唄はより「島化」している。奄美の中でのアイデンティティとしてのシマ唄の位置づけは明らかになりつつあるが、島外の奄美のコミュニティにおけるシマ唄について言及されることは未だ少ない。

本研究では、東京でシマ唄の唄者(うたしゃ)として活動する筆者が綴った過去 1 年間のフィールドノートのデータをもとに、社会から注目されてこなかった国内ディアスポラとして奄美出身者が東京という大都市においてシマ唄をどのようにアイデンティティの表現として使っているのかについて調査した。

【研究成果】

(Phillippi, Lauderdale, 2017)は、1980年代以前はフィールドノートはただのメモであり分析に役立つとは考えられていなかったが、現在では質的フィールドノートは厳密な質的研究に不可欠な要素であると理解されていることを指摘している。また、フィールドノートは、エスノグラフィック・レポートの執筆において、研究者とその対象者を結びつける重要な役割を果たす(Wolfinger,2002)。

これにより、唄者&研究者として奄美の人々の島唄を通じたアイデンティティ表現の具体的な現象を観察し記録するには、フィールドノート分析を方法論として取ることが相応しいと考えた。筆者は過去1年間定期的に奄美の人々が集う東京都内の居酒屋に通い、以下の対象を中心にフィールドノートを記録した。

対象

首都圏の「シマ唄社会」の関係者↓

- 1 唄者
- 2 ビジネスマン(奄美居酒屋店主・イベント開催者など)
- 3 奄美出身者/奄美2世
- 5 島外出身者(シマ唄学習者/唄者のファンなど)

1年間フィールドノートの記録を進める中で、東京の奄美ディアスポラは彼らの新しい集落を東京で作っていることが分かった。その中で、彼らは東京のシマ唄ファンを巻き込みながら自身の集落/島の唄を代表して歌い継いでいる。異なるシマ唄同士が日々ぶつかり合うことで、自分のシマ唄を洗練させつつお互いに「奄美」という枠組みを強化しているのである。シマ唄は彼らにとってお互いのコミュニケーション手段であり、奄美を思い出すための手段であり、マイノリティとしてのホスト社会へのアピールと溶け込む手段である。

【今後の課題】

ニューヨーク、ロス、ブラジルにも奄美のコミュニティがあるようである。今回は東京の奄美コミュニティについて取り上げたが、今回得た研究のフレームワークを活かし今後は国内だけでなく世界中の奄美ディアスポラ研究へと発展させて行きたい。また、故郷との距離や移住先の土地の特徴がどれほど彼らの活動に影響を与えているのかを見ていきたい。

【謝辞】

この度、参加費を支援していただき誠にありがとうございました。